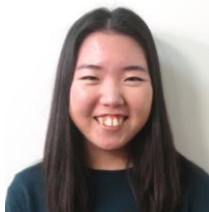


<イエメン事業> 「安全対策リーフレットで子どもたちの命を守る」



ICAN 日本事務局
古谷 小夏
～プロフィール～
立命館アジア太平洋大学卒業後、
2019年10月より
現職。

今年4月に最初の感染が確認されて以来、イエメンでも新型コロナウイルスが深刻化しています。しかし空き缶等を回収して売る事で生計を立てている事業地の多くの人々は、外出せざるを得ない状況にあります。長年続く紛争によりイエメン国内で機能している医療施設は紛争前の約半分と言われており、さらに現地では実際の感染者数は政府によって発表されている数よりもはるかに多いのではないかと危惧されています。

これを受け、首都サナアで行っている栄養改善の為に粉ミルク提供に加え、何かできることがないかとイエメンの現地スタッフとアイディアを出し合いました。当初、石鹸の配布という案が出ましたが、現地では紛争の影響により水へのアクセスが限られており、対象地域の全員がきれいな水で手を洗える状況にありません。さらに石鹸やアルコール等を提供するだけでは一時的な対処になってしまいます。以前にもコレラやマラリアの大規模な蔓延があったイエメンで、今後も持続的に行える事はないのか、壁にぶつかりました。

そこで、生活環境に関わらず活用することができる安全対策リーフレットの配布を考案しました。リーフレットの配布には医療へのアクセスが限られている中、自身や大切な人を守るために自分自身でできることを実践してもらいたいという思いが込められています。そのため普段の生活に取り入れやすい咳エチケットや部屋の換気などの情報を選び、絵や易しい表現を使用する事で子どもたちにもわかりやすいように工夫しました。配布当日は、子どもたちが一ヶ所に集まらないよう時間をずらす等、安全に配慮して行いました。子どもたちからは、「普段からできる予防対策を知れてよかった」等の声を聞く事ができ、提供した事の意味を実感しました。



イエメンでは新型コロナウイルスによる感染拡大が続いており、安全を確保するためにも、まずは新型コロナウイルスや感染予防対策について知ってもらうことが必要です。6月には今回とは別の子どもたちを対象にリーフレットを配布し情報を広げていく予定です。こうした活動をする上で日々感じることは、以前から困難だった紛争地の生活がさらに厳しくなっているという事です。新型コロナウイルスが世界各国で経済的・社会的な影響を及ぼす中、イエメンの人々は感染のリスク以外にも空爆や飢餓といった危機と隣り合わせに暮らしています。アイキャンではそうした環境で命を繋ぐために、現地の声に耳を傾けながら今後も活動を続けていきます。

ある日のスケジュール

- 10:00 メールチェック
- 10:30 イエメン情勢確認
- 13:00 裨益者リスト、各種書類確認
- 16:00 現地スタッフとの進捗確認・情報共有
- 18:00 現地からの報告書・写真確認
- 19:00 帰宅

ジブチ事業

5月/アリアデ・ホルホル(ジブチ)

ジブチ国内2つの難民キャンプにおいて食糧提供を実施



ジブチでは、新型コロナウイルスの影響により、出稼ぎでキャンプから離れていた親が戻れなくなる等、子どもたちに食糧が届きにくくなっている状況を受けて、アリアデとホルホルのキャンプで合計107人の子どもたちに食糧提供を実施

しました。子どもたちは、「食糧をもらえると聞いていなかったので驚いた!」ととても嬉しそうなお様子でした。提供は、マスク着用や社会的距離を保ち、安全対策に配慮して実施しました。

ボランティア・寄付活動推進事業

5月/サンマテオ(フィリピン)

子どもの家の2階備品が到着



5月末、フィリピンサンマテオ市にある児童養護施設「子どもの家」の2階に設置するための二段ベッド9個が搬入されました。これにより、30名以上の身寄りのない子どもたちを受け入れる事のできる準備が整いました。子どもの家で暮らす子ども

からは、「手作りです丈夫な二段ベッドで気に入っています。僕が最初にこのベッドで寝ます!」と話してくれました。

フィリピン事業

5月/マニラ(フィリピン)

子どもたちの命を繋ぐ活動を実施



フィリピンマニラ首都圏では、先月に引き続き、新型コロナウイルスの影響により収入の機会を失った路上の子どもたち及びごみ山周辺で暮らす41世帯(約250名)への食糧提供を実施しました。路上で暮らす子どもたちやその家族は、政

府や自治体からのサポートを受ける事ができていません。子どもからは「路上で生活している僕たちに食糧を提供してくれるのはICANだけです」という声が聞かれました。

日本事業(長野・自然災害事業)

5月/長野

被災家屋から住民の集会場へ



長野県穂保地区で、台風19号により被災した家屋を活用した、住民が集まる事のできるサロンを作るため、ボランティアさんとともに、修復作業を行いました。住民の方からは、「もう解体しようと思っていた家がこんなにもきれ

いになり嬉しい。これでみんな集まりまた賑やかになる」と喜びの声も聞かれました。今後サロンの運営は住民の方により行われます。